

# 炭俵百韻における大気現象

田宮兵衛

## 1. はじめに

本文で、芭蕉七部集炭俵の百韻中にあらわれる大気現象について、前後句との関連を確認する。これによって、文芸作品の中に定着された当時の人々の大気現象への関心のありようを知ることが目的であり、当時の大気現象への関心が現在と異なるのかを知ることができることを想定している。この想定が正しければ、人間、少なくとも日本人が大気現象に対して持つ感覚の幾分かに関する情報が増すであろう。

筆者は既に芭蕉七部集の37歌仙中27歌仙について同様な作業（田宮1990, 1992, 1993, 1999）を行ってきた。大気現象は、降水・風・天候・気温表現に大別できたので、本報でもこれに従う。

連句の形式としては、芭蕉により確立された36句からなる歌仙が良く知られている。百韻はその名の通り100句からなる。連歌から俳諧の連歌すなわち連句となり、その段階で長さが縮められ、百韻を経て最終的に36句からなる歌仙に落ちついたと理解している。

しかしながら、百韻と歌仙の式目（ルール）は月花の定座（おおよそ取り決められた位置に、月または花を題材とする句を置く。）の数が、歌仙の二花三月に対し、四花七月である点を除けば同じであるらしい（中村・萩原1975、東1978）。

## 2. 炭俵百韻

元禄七年刊行された俳諧炭俵集は序および奥付によれば、孤屋・野坡・利牛が撰者である（中村1966）。炭俵百韻は、芭蕉七部集中唯一の百韻であり、上巻冒頭3歌仙（梅が香、兼好も、空豆の）の次に掲載されている。作者は利牛・野坡・孤屋である。付ける順番は、発句から48句までが利牛・野坡・孤屋、49句から99句が利牛・孤屋・

野坡、拳句は執筆による。

次節で炭俵百韻について、大気現象を含む句とその前句、後句を発句からの順番を付して掲げ、3句の関係を見る。各句の後ろに〔季〕、作者名（2回目以降は頭文字のみ）を示す。季は原則として白石・上野（1990）により、春・夏・秋・冬・雑をそれぞれf, s, h, w, zと記号化して示す。大気現象は□で囲んだ。また、それが季語となっている場合は季を示す記号に「\*」を付した。また、読み下すのに最低必要と思われるふりがなを、白石・上野（1990）を参項にして付すが、大気現象を表わす□と重なる場合は読み難いので、句の直後の説明において付す。なお、「ゝ」を除く反復記号は「々」で置き換えた。

大気現象を含む句とその前・後句の関係については、上記白石・上野（1990）の他、中村（1966）の校注を参考にした。七部集の歌仙、特に芭蕉が参加している場合には、多くの注釈書があるが、炭俵百韻については、そのような事情にはないので、両書にもっぱら依存した。

## 3. 実例

3、4句に大気現象が連続して出てくるが、連続的に示し、説明する。

2. 岸のいばらの真ッ白に咲く [s] 野坡
3. 雨<sup>あがり</sup>数珠懸鳩の鳴出して [z] 孤屋
4. 与力町よりむかふ西<sup>かせ</sup> [z] 利牛
5. 竿竹に茶色の紬たぐりよせ [z] 野

第3句に雨がある。しかし、2句との関係は白い数珠懸鳩である。4句とは雨が同じ大気現象の西風と対応する。雨があがって鳩が鳴き出すとすれば、暖候季の感じが強く、さほど強くない温帯低気圧の通過後のこととなろう。その場合西風と雨の関連は、本邦付近では天候の推移が西から東へ生じることが当時から認識されていたとの解釈がある（白石・上野1990）。当然であるが、当時

はそれが偏西風に乘った天気系の移動であることは分かっていない。しかし、5句で、竿竹の軸をたぐりよせている風は、冬の季節風の強さを思わせる。「雨」は3句と4句、「風」が4句と5句を結び付けている。

11. 松坂や矢川へはいるうら通り [z] 野  
 12. 吹る<sup>ひ</sup>餅もつらき闇の夜 [w] 孤  
 13. 十二三井の衣裳の打ちそろひ [z] 利

12句の寒風で餅が痛んでつらい状況は、11句のうら通りで見かけたことである。13句は全体として12句の対極的な状態を示したのであろうか。

17. 近江路のうらの詞を聞初て [z] 野  
 18. 天氣の相よ三か月の照 [h] 孤  
 19. 生ながら直に打込ひしこ漬 [h] 利

18句の天気は、三日月が照る晴れた夜である。前句の近江の方言を初めて聞いている時とは、旅の途中でありそれだけ、天候が気になるのであろう。後句とは、天気によって左右される漁業に関する生業(カタクチイワシの塩漬づくり)の一面である。「天氣の相」が前後句ともに関連する。

21、23句に大気現象が出てくる。煩わしいが、22句を重複させて3句づつ示す。

20. 椋の実落る屋ねくさる也 [h] 野  
 21. 帯売の戻り連立<sup>つれだつ</sup>花ぐもり [f\*] 孤  
 22. 御影供ごころの人のそはつく [f] 利

21句は花ぐもりの下、帯売りの一団が行商から連れ立って戻るところであり、後句の弘法大師の法会(3月21日)である御影供の時期にそわついている人々の中に帯売りの一団も含まれるのであろう。前句は秋なので、ここで季移りとなっている。椋の実が落ちて屋根でくさるのは春ということで可能であるとされる。一団の帯売りが集まっても不自然ではない広さの場所には、椋の植栽があると考えたのであろう。花ぐもりは後句と共有されている。

22. 御影供ごころの人のそはつく [f] 利  
 23. ほか々々と二日<sup>ふたひ</sup>灸のいばひ出 [f] 野  
 24. ほろ々々あへの膳にこぼるゝ [z] 孤

23句の二日灸は2月と8月の2日に灸を据える習慣を指す。前句が春なので2月となる。「ほか

ほか」という温度表現は、二日灸の後が御影供頃まで熱を持って傷んでいることになる。しかし、御影供頃の陽気が「ほかほか」しているという気候学的暖かさの表現でもあろう。後句との関連については寺田(1931)の指摘するように、「ほかほか」と「ほろほろ」の音韻的類似が大きい。起こっていることは、灸の後の傷で手先がやや不自由な状態である。「ほかほか」が前句とは暖かさの表現として、後句とは音韻的に関連する。

27. 段々に西国武士の荷のつどひ [z] 孤  
 28. 尚きのふより今日は<sup>なほ</sup>大旱 [s\*] 利  
 29. 切ウジの喰倒したる植たばこ [s] 野

28句の大旱は前句の荷役作業の大変さを強調する。そのような天候では、作物も弱り、虫害を受けるとというのが後句である。ウジの字体はJIS第二水準に無いので、カナとした(常用漢字ならば蛆)。「大旱」が前後句ともに関連する。

41. 浜迄は宿の男の荷をかゝえ [z] 野  
 42. 師走比丘尼の諷の寒さよ [w\*] 孤  
 43. 餅搗の臼を年々買かえて [w] 利

42句で比丘尼が師走に諷しても、施しに応じる者はなく、寒々としている所は、前句で宿の男が荷を運んでくれた船着場である。後句では、門付けしている比丘尼をよそににぎやかに餅搗きを始めようとしている、毎年臼を買いかえる豊かな家である。「寒さ」が示す雰囲気は前句に、季節が後句に対応している。

50、52句に大気現象が出てくるので、51句を重複させて3句づつ示す。

49. 月花にかきあげ城の跡ばかり [f] 利  
 50. 弦打<sup>つづら</sup>風海雲とる桶 [f] 孤  
 51. 機嫌能かいこは庭に起かゝり [f] 野

50句の弦打は現在の高松市鶴市町に東方の山の名で、讃岐の枕詞であるとのことである。したがって、そこから吹き降ろす弦打風の下で海雲を取っている。後句は、磯でする生業に、家でする生業としての養蚕を対比した。また弦打は前句の城からの連想である。

51. 機嫌能かいこは庭に起かゝり [f] 野  
 52. 小昼の頃の空静也 [z] 利  
 53. 縁端に腫たる足をなげ出して [z] 孤

52句は、小昼(朝食と昼食の間の間食)を静かな晴れた空の下で取っている、前句の生業における一風景。後句はその陽光の中での風景。いずれも穏やかな「空静」かな日の風景である。

60. けふはけんがく寂しかりけり [z] 野  
 61. 薄雪のこまかに初手を降出し [w\*] 利  
 62. 一つくなりに鱈の雲腸 [w] 孤

62句では細かな雪が降り出しているのであるが、薄雪は、前句の「今日はことのほか寂しい」からの連想である。後句は、そのような天候の起こる季節の食材である鱈の雲腸を題材とした。雲腸は白子のことだそうなので、大気現象とは関係ない。

70. 御茶屋のみゆる宿の取つき [z] 利  
 71. ほや々々とどんどほこらす雲ちぎれ [f] 孤  
 72. 水菜に鯨まじる惣汁 [f] 野

71句では雲がちぎれる強風の下でどんど焼をしている。その場所は前句の宿場のはずれである。後句の水菜と鯨の惣汁はどんど焼をする時節の料理であろう。

74. 尻軽にする返事聞よく [z] 孤  
 75. おちか、るうそ々々時の雨の音 [z] 野  
 76. 入舟づく月の六月 [s] 利

75句では、薄ぐらい時分に雨が降り出しているが、前句が雨に対する措置を命じた際の返事とすれば、夕方になろう。後句はその雨を六月の雨とした。「雨」が前後句ともに関連している。

78. 尚云つのる詞がらかひ [z] 野  
 79. 大水のあげくに畑の砂のけて [z] 利  
 80. 何年菩提しれぬ枿の木 [z] 孤

79句では洪水後耕地に土砂が流入したので、それを除去している。そのため生じた土地境をめぐるいざこざを、前句で言い募っている言葉の内容とした。後句の題材である樹齡も分からぬ枿の古木は、その洪水で流されてきた。いずれも「大水」により起こったことである。

87. 気にか、かる朔日しまの精進箸 [z] 野  
 88. うんじ果たる八専の空 [z] 利  
 89. 丁寧に仙台俵の口かゞり [z] 孤

88句は雨にうんざりしている(うんじ果てた)状

態である。すなわち、八専の空が雨天になる。八専とは、十二支・十干の壬午から癸亥の12日のうち五行(木・火・土・金・水)が一致する丑・辰・午・戌を除いた8日であり、この日は雨になるという言い伝えがある。前句では、朔日から物忌み用の箸を使っているのが、何事かが気にかかっているはずである。雨で漁が出来ない島では精進料理となる。後句では雨なので、俵の口をかがるなどの室内作業を行っている。「八専の空」すなわち雨が前後句と関わる。

93句と95句に大気現象があるので、94句は重複させて示す。

92. 包で戻る鮭のやきもの [h] 孤  
 93. 定免を今年の風風に欲ぼりて [h] 野  
 94. もはや仕事もならぬおとろへ [z] 利

93句は、過去の平均年貢額で徴収する定免を風害を理由に軽減を図ろうとする欲張り。前句はその際、役人に手土産として持たせた鮭である。後句は、年貢の軽減の理由を老齢化とした。上野・白石では93句の季語を風すなわち暴風としているが、筆者は定免が秋の季語となり得ると考える。

94. もはや仕事もならぬおとろへ [z] 利  
 95. 暑病の殊土用をうるさがり [s\*] 孤  
 96. 幾月ぶりでこゆる逢坂 [z] 野

95句では、夏の高温に体力が追いつかず暑病となった人が殊に土用の頃を大変がっている。前句でその人は、仕事も出来ないほど弱っている。後句では、何ヶ月かぶりに京都から逢坂を越える人は、暑さを避ける人か、暑病が癒えた人である。暑さが前後句ともに関連している。

#### 4. 集計

まず、表1に、炭俵百韻に現れた大気現象を示す。このうち、「八専」は国語辞典には出ていないが、現代人の常識にはないといって良いであろう。これ以外は、現象として、また、前後句との関わりにおいて、容易に諒解可能である。

大気現象は、降水4、風4、天候6、気温表現3と17句に出てくる。88句の「八専の空」は降水に分類することも可能であるが、「空」という表現を重視して天候に分類した。いずれにせよ、4

種の大気現象の出現状況は比較的偏りが少ない。

表1 炭俵百韻の大気現象

		句順	作者	季 (*季語)
降水	雨あがり	3	孤屋	z
	薄雪	61	利牛	w*
	雨	75	野坡	z
	大水	79	利牛	z
風	西風	4	利牛	z
	吹かる、	12	孤屋	w
	凧	50	孤屋	f
	風	93	野坡	h
天候	天気相	18	孤屋	h
	花ぐもり	21	孤屋	f*
	大旱	28	利牛	s*
	空静	52	利牛	z
	雲ちぎれ	71	孤屋	f
	八專の空	88	利牛	z
気温表現	ほかほか	23	野坡	f
	寒さ	42	孤屋	w*
	暑病	95	孤屋	s*

また作者別では、利牛、孤屋、野坡を比較すると、孤屋が長・短句で各4句合計8句大気現象を出しているのが目立つ(表2)。利牛は長句2と短句3、野坡は長句3である。なお、各人の句数は執筆の1句を除いて3等分した33句ずつである。作者別長・短句の数は、2節で述べた作句順にしたがって、利牛・野坡は長句17・短句16、孤屋は長句16・短句17となる。

表2 作者別大気句数とその割合

	利牛	孤屋	野坡	執筆
大気句数	6	8	3	0
同%	18.2	24.2	9.1	0

大気現象の句を多く出した孤屋は、そのうち3句が季語(21句;花ぐもり;春、42句;寒さ;冬、95句;暑病;夏)となっている。利牛は夏・冬各1句(28句;大旱、61句;薄雪)、野坡には季語にした大気現象はない。このことは大気現象に関心があれば、それを題材にする句数も増え、季語とすることも増えるという単純な事実の反映と考える。

表3に季別の句数と、季別の大気句数、および

その比率を示す。雑が60の他は、秋、春、夏、冬の順に句数が減ることはある程度式目の反映である。しかし、大気句数の割合は、冬、春、夏、秋、雑の順となり、冬が多いことは七部集の他の歌仙と同じ傾向である。

表3 季別句数・季別大気句数

	春	夏	秋	冬	雑
句数	11	9	15	5	60
大気句	4	2	2	3	6
同%	36.4	22.2	13.3	60.0	10.0

## 5. おわりに

筆者が大気現象と連句に関する一連の作業に着手するに当たり、本来最初に参照すべき文献として寺田寅彦の連句に関するの一連の論考(寺田1931,1932a)があった。前報(田宮1999)では同氏の季語に関する論考(寺田1932c)は参照したが、連句に関する議論にはまだ触れていない。

寺田寅彦の連句に関する議論においては、連句と西洋音楽の構造的・形式的類似性の指摘や、映画のモンタージュとの対応が述べられている。前者では句の関係を音程・和音概念に、また歌仙をソナタ・交響曲に、また宗匠を指揮者の役割になぞらえる。

また、映画のモンタージュについては、映画芸術(寺田1932b)中で「映画と連句」としてさらに詳細に論じている。映画と連句に関連して述べる必要があるのは、一昨年公開された「冬の日」のアニメーションである。プロデューサーは鳥村達夫、企画監督は川本喜八郎である(遠藤2003)。寺田の連句モンタージュ論が具体化されるのかと期待したが、以外に迫力が感じられなかった。本来三句のわたりで解すべきところを2句ずつ区切ったことも一因であろうが、付け方をここまで具体的に見せられると、簡単には同意できないのである。連句が本質的に、連想の自由度が多い言葉による文芸であることが再確認されたと解釈している。

しかしその映画は、今日既に芸術としての最盛期は過ぎたかのように見える。寺田(1932a)では不易流行概念の「流行」に関連させて、「現代の俳諧に元禄時代のような句ばかりを作ろうとする愚」を指摘している。当時やっと声が出始めて、芸術としての新たな一歩を踏み出した映画に寄せ

た氏の思いが100年を待たずして、早くも潰えつつあることをどう感じるであろうか。

音楽にしても「モーツアルトやベートーベンのような曲ばかりを現在作ろうとすれば愚」となってしまうことは明らかである。地域における自然と人間の関りの考察を、もはや流行ではない地理学的研究としてなした場合、内容が如何に不易であっても同じことが起こっている。現在は「不易流行」の流行のサイクルが著しく短い時代のようなものである。

また、寺田は芭蕉が俳諧の真義を明らかにするに当り、行脚により世情を究め物情に徹したからとしている。これは、俳諧においてすらフィールドワークが重要であることの指摘である。形而上学を除きフィールドワークを要しない知的営為はあり得ないということである。

寺田(1932a)の「連句心理の諸現象」では、連句の付け合いを連想作用とし分析を加えている。その分類や「観念群」という概念は、付け合いに関する即物的な理解に有用と思う。

しかし、この理解が深まることと、鑑賞における付け合いの理解とは別の問題である。たとえば、炭俵百韻の第3句に出てくる数珠懸鳩を例にすると、筆者が数珠懸鳩を始めて知ったのは、動物生態学者 K. ローレンツ(1989)のソロモンの指輪によってである。数珠懸鳩を同じハト科のヨーロッパキジバトと一緒に籠に閉じ込めると、弱者が死ぬまで傷め続ける。攻撃力が弱く逃足の早い動物を逃げられないようにして閉じ込めると、個体差の強弱によって、こういうことになるそうである。他方、オオカミのように容易に弱者を殺傷し得る動物は、同種が死ぬまで闘い続けることがないような本能的な抑止力があるという話であった。このエピソードを知っていると、単純に白から数珠懸鳩を連想すること、それを連想せずに次に進むことはできない。

前報(1999)以降、連句に関連する図書がいくつか刊行された。連句雑俎(寺田1931)でこのような議論がなされていることを知ったのは、小林(2002)による。同書の論の展開にも関心があるが、その後同名の書を榊原(2003)を刊行しているの、両書を含め寺田寅彦の連句論について言及するのは別の機会としたい。

#### 献辞

本文を2004年3月をもって地理学講座から退官

された内藤博夫先生に同志として捧げる。地理学ならびに本学地理学講座の存亡に関わる態度においては、先生は不言実行の上、筆者は有言不実行の徒ということで見かけ上の差は大きい、目指すところは同じと見た。僭越ながら同志と考える理由の一つである。

#### 引用文献

- 東 明雅(1978):『連句入門 芭蕉の俳諧に即して』、中央公論社、pp221.
- 小林惟遺(2002):『寺田寅彦と連句』、勉誠出版、pp370.
- 榊原忠彦(2003):『寺田寅彦と連句』、近代文芸社、pp244.
- 白石梯三・上野洋三校注(1990):芭蕉七部集. 岩波書店、pp650+49.
- 田宮兵衛(1990):『猿蓑』の連句における大気現象について、お茶の水地理、第31号、9-15.
- 田宮兵衛(1992):『冬の口』における大気現象について、お茶の水地理、17-25.
- 田宮兵衛(1993):芭蕉七部集の歌仙における大気現象について—『阿羅野』・『ひさご』・『炭俵』・『續猿蓑』の場合—、お茶の水地理、第34号、8-20.
- 田宮兵衛(1999):蕉門連句における大気現象—『阿羅野』の場合—、お茶の水地理、第40号、57-67.
- 寺田寅彦(1931):連句雑俎. 小宮豊隆編『寺田寅彦隨筆集第三卷』(1948)、岩波書店、45-99.
- 寺田寅彦(1932a):俳諧の本質的概論. 小宮豊隆編『寺田寅彦隨筆集第三卷』(1948)、岩波書店、256-277.
- 寺田寅彦(1932b):映画芸術. 小宮豊隆編『寺田寅彦隨筆集第三卷』(1948)、岩波書店、201-238.
- 寺田寅彦(1932c):天文と俳句. 『寺田寅彦全集第七巻「俳諧論」』(1950)、岩波書店、558-570.
- 遠山純生編(2003):『冬の日オフィシャルブック』、エスクァイアマガジンジャパン、pp167.
- 中村俊定校注(1966):芭蕉七部集. 岩波書店、pp446.
- 中村俊定・萩原恭男校注(1975):芭蕉連句集. 岩波書店、pp404.
- ローレンツ、K. 日高俊隆訳(1987):『ソロモンの指輪—動物行動学入門—』、早川書房、pp238.

Weather in “Charcoal Sack with 100 Phrase (SUMIDAWARA 100-IN)”

たみや・ひょうえ

お茶の水女子大学 教授